

第四篇 大聖、晩年の光輪 その二
廿五、 四 処 道 場

二十五日 南条^{ひょうえ}兵衛七郎殿御返事 (定遺 1884)

其上^ノ、此処^{このところ}は人倫^{じんりん}を離れたる山中^{さんちゆう}也。東西南北^{とうしなんぺい}を去^りて里^{さと}もなし。かかるいと心細^{こころこま}き幽窟^{ゆうくつ}なれども、教主^{きゆうしゆう}積尊^{せきそん}の一大事^{いちだいじ}の秘法^{ひぽう}を靈鷲^{りやうじゆ}山^{さん}にして相伝^{あひでん}し、日蓮^{にっれん}が肉団^{にくだん}の胸^{むね}中に秘^{かく}して隠^{たも}し持^もてり。されば日蓮^{にっれん}が胸^{むね}の間^まは諸^{しよ}仏^{ぶつ}入^{にやう}定^{じやう}の処^{じよ}也。舌^{した}の上^{うへ}は転法^{てんぽう}輪^{りん}の所^{ところ}、喉^{のど}は誕生^{たんにん}の処^{じよ}、口^{くち}中^{ちゆう}は正覚^{しやうかく}の砌^{せき}なるべし。かかる不思議^{ふしぎ}なる法華^{ぽうげ}経^{きやう}の行者^{ぎやうじや}の住^す処^{じよ}なれば、いかでか靈山^{りやうさん}浄土^{じやうと}に劣^せるべき。法妙^{ぽうみやう}なるが故^{ゆゑ}に人貴^{ひとたつと}し。人貴^{ひとたつと}きが故^{ゆゑ}に所尊^{ところたつと}と申^まは是^こ也。神力^{しんりき}品^{ひん}に云^いく。若林^{もしん}の中に於^おても若樹^{もしん}の下^{した}に於^おても 若僧坊^{もしん}に於^おても 乃至^{乃至}而般涅槃^{はんねはん}したまふと云々。此砌^{このみぎり}に望^{のぞ}まん輩^{ともがら}は無始^{むし}の罪障^{ざいじやう} 忽^{たちまち}に消滅^{しょうめつ}し、三業^{さんごう}の悪^{あく}転^{てん}じて三徳^{さんとく}を成^なぜん。彼中天竺^{かのちゆうてんじく}の 無熱池^{むねつち}に臨^{のぞ}み悩^{のう}者^{じや}が、心中^{しんちゆう}の熱氣^{ねつき}を除^{じよ}癒^ゆして 充滿^{じゆうまん}其願^{ごん} 如清涼池^{にじやうりやうち}とうそぶきしも、彼此^{ひしこ}異^{こと}なりといへども、其意^{そのこころ}は争^いか替^かるべき。彼月氏^{かのがつし}の靈鷲^{りやうじゆ}山^{さん}は本朝^{ほんちゆう}此身^{こゝろ}延^{のび}の嶺^ね也。参詣^{さんぎ}遥^{はるか}に中絶^{ちゆうせつ}せり。急々^{きゆうきゆう}に來臨^{くわん}を企^{くわ}つ可^べし。是^{こゝろ}にて待入^{まちい}候^まべし。哀々^{あわれ} 申^まつくしがたき御志^{おん}かな、御志^{おん}かな。

(弘安四年九月十一日)